



### おんた 小鹿田焼の歴史

小鹿田焼の開窯は江戸時代中期。筑前の国小石原焼の陶工・柳瀬三右衛門と日田郡大鶴村の黒木十兵衛によって始められました。これに小鹿田地域の仙頭であった坂本家が土地の提供者として加わり、今日の小鹿田焼の基礎が築かれました。

昭和6年に民芸運動の指導者・柳宗悦氏がこの地を訪ね、その伝統技法と質朴な作調が賞揚されました。また、昭和29年・39年には、世界的にも著名な英国の陶芸家、バーナード・リーチ氏も来山し、作陶された経緯があります。

平成7年には、国の重要無形文化財保持団体の指定を受けました。今後も、集落の谷川でのんびりと陶土をつき続ける唐臼(からうす)のように、恵まれた自然環境の中で、庶民の陶器の伝統を後世に伝うべく、永い歴史と伝統を守りながら、じっくりと手仕事に取り組んでまいります。



轆轤(けろくろ)手作業後、各窯元の軒先に所狭しと並べられる。窯入れ前の天日干し。

### 神々に祈りをささげて火入。

里内に点在する個人窯と、集落の真ん中にある共同窯にて、2ヶ月に一度窯焚きが行われる。丸2日以上焚き続け、陶工たちが寝ずの番で見守る。



斜面を利用した通風の登り窯で、1250℃前後の高火度で焼成される。日田の製材所からの杉材の割き落としを薪として使用。

### すこやかな美しさ。

底部を小さくした重心が上にある独特のバランスは、きめが細かく割れやすいという土の特性からくる、小鹿田焼ならではの特徵。

### 陶土完成迄の工程

全工程を、昔ながらの手仕事のみで行っている集落は他にない。



土採り場から運ばれた土を10日程乾燥。さらに2週間かけて唐臼でつき上げられる。



水槽に入れ、攪拌、ゴミや砂を取り除き、沈殿した泥土で水槽がいっぱいになるまで繰り返す。



水分のみ下に浸透し落ちるように工夫された「おろ」と呼ばれる水抜き台に移し、手ですぐえる位になるまで水分を抜く。



乾燥用の素焼鉢や乾燥窯に移し、成形に適した硬さになるまで放置する。ここまでで約1ヶ月かかる。(ひと窯分の陶土を用意するには2ヶ月を要す。)

### 小鹿田焼の主な手法



飛びかん



打ち刷毛目



打ち掛け



流し掛け



櫛描き



指描き

春浅い夜明け前の小鹿田の里



### 「ぎぎい〜いごっとな！」

静かな里のあちこちで響く不思議な音……唐臼のみで土づくりをする集落は世界でもここだけ。平均4基づつ各窯が所有する「唐臼」の情景は、「残したい日本の音風景百選」に選ばれた。

### 日常のあり方そのものが、貴重な存在である小鹿田。

昔も今も、自然に満ちた美しい里。ししおの原理でゆっくりと動き続ける苦むした唐臼が、悠久の時を感じさせてくれる。



みだりに昔をくずさぬように……  
親と子母・妻嫁家族全員の手によってつなげられてきた、自然と共にゆっくりと動き続ける小鹿田の「心」。この里が代々継承し続けるのは、決して皮だけではない。

### 小鹿田焼協同組合 窯元のご紹介

- 坂本義孝(傳)窯  
カネイチ Tel.0973-29-2449
- 坂本正美(母)窯  
ヤマニ Tel.0973-29-2405
- 黒木史人窯  
ヤマザイ Tel.0973-29-2429
- 黒木孝子(嗣)窯  
イリウイ Tel.0973-29-2402
- 黒木富雄(母)窯  
カネマル Tel.0973-29-2403
- 柳瀬晴夫(元)窯  
ヤマワン Tel.0973-29-2469
- 柳瀬朝夫(母)窯  
イリサン Tel.0973-29-2440
- 坂本工窯  
ヤマイチ Tel.0973-29-2404
- 坂本浩二窯  
イリイチ Tel.0973-29-2467
- 小袋定雄(理明)窯  
ヤマコ Tel.0973-29-2400



小鹿田焼の伝統が分かる歴史資料館

### 小鹿田焼陶芸館

<入館無料>

